

多文化主義とシンデレラ : Princess Furball と ディズニーの Cinderella

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院文化情報学部門・メディア文化情報学

<https://doi.org/10.15017/6796435>

出版情報 : 言語科学. 39, pp.89-104, 2004-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン :
権利関係 :



多文化主義とシンデレラ

—Princess Furballとディズニーの Cinderella—

谷 口 秀 子

1. はじめに

おとぎ話のヒロインの代表的なものは、シンデレラであろう。現代においても、王子と結婚して幸福になるシンデレラは、女の子たちのあこがれである。シンデレラに限らず、おとぎ話においては、すてきな男性に見初められて結婚することが、女性にとっての到達点であり、幸せになるほとんど唯一の方法である。書物の形で現存する西洋のおとぎ話の多くは、類似的なプロットを持ち、同じような価値観を共有している場合が多い。例えば、『シンデレラ』、『白雪姫』、『眠り姫』は、いずれも、気だてが良く美しいが主体性に欠ける女性主人公が、魔法などの非日常的な手段という、自分以外の力によって苦境から救われ、王子に見初められて幸せな結婚をするという筋立てである。この時、ヒロインの側には、結婚相手を選ぶ権利はなく、選ぶのは常に男性である王子の方である。また、ヒロインはもちろん、読者も、ヒロインに求愛する王子が彼女にとってふさわしい唯一無比の男性であり、彼女を生涯にわたって幸せにするであろうことを無条件に確信させられるのである。また、王子は能動的で、勇気や機知や行動力を示す場を与えられるが、ヒロインは主体性に乏しく、受動的で、自分の努力で苦境から脱出することなど考えもしないのである。すなわち、彼女たちは、魔法や動物などの非日常的な力や男性の助けを頼りにして、自分の人生や運命を自分で切り開くことがないのである。それを象徴的に示しているのが、白雪姫と眠り姫の深い眠りであり、ふたりは、王子に口づけされるまで、深く眠り続け、口づけによって、目が覚めた瞬間、王子に求愛され、運命が変わるのである。

2. ペローとグリムのシンデレラ

『シンデレラ』(Cinderella)と言う場合には、ガラスの靴に象徴される、ペロー(Perrault)の再話によるフランス版の『シンデレラ』(『サンドリヨン』)を下敷きにした、我々に馴染みの物語を指すのが普通である。¹⁾しかしながら、ペローの『シンデレラ』は、世界中に何百と存在するシンデレラ的な物語のひとつに過ぎず、彼の価値観や女性観にもとづいて語り直されていることを忘れてはならない。

そもそも、シンデレラは、「灰かぶり女」の意味で、灰にまみれた女性、かまどの灰を掃除するような下働きをする女性のことであり、特定の女性の名前ではない。そのため、灰かぶり伝説は、フランス版の『シンデレラ』以外にも、ヨーロッパを中心に多数存在する。そのようなシンデレラ物語の多くに共通するのは、不当な仕打ちを受けて、苦境に突き落とされて灰かぶりとなった美しい女性が、王子(または王)に見初められてその後となり、終生幸せに暮らすという筋書きである。しかしながら、個々のシンデレラ像は、さまざまで、すべてのシンデレラが、美しく気だてが良いばかりで受け身的で他者依存的な、フランス版のシンデレラ像のようであるとは限らない。

とは言え、ペローが作り上げたフランス起源のシンデレラ像が支配的な今日、このシンデレラ像が、玉の輿に乗って幸せになる女性の代名詞として受け取られているのも事実である。現在、世界の多くの地域で親しまれているディズニー・アニメのシンデレラも、このようなシンデレラを下敷きにしたものである。さらに、グリムが再話した「灰かぶり」(“Aschenputtel”) ²⁾ は、現在主流になっているフランス起源のシンデレラと細部では異なるものの、ほぼ同じ筋立てであり、ヒロインの受動性にも、ほとんど違いがない。

『シンデレラ』においては、継母にひどい仕打ちを受け、灰をかぶって下働きの仕事をさせられている時、ヒロインは、従順で憤み深く、つらい仕打ちに耐えるが、このことこそが、彼女の美德とされるのである。また、シンデレラは、ただひたすら我が身の不幸を嘆くばかりで、閉塞した状況から脱け出すために何らかの行動を起こしたりはしない。灰にまみれて下働きの仕事をさせられているシンデレラは、しまいには、継母の娘たちと同じように、着飾って城の舞踏会に行くことに成功するのであるが、彼女自身の能力や努力や行動によってではなく、突然現れた妖精の名付け親(名付け親の仙女)の魔法によってである。このように、シンデレラは、自分の運命に対し、あくまで受け身であり、こうなったらいいなと願うばかりで、何の行動も起こさない。シンデレラは、主体的に行動せず、誰かが助けてくれるのをただ待っている女性なのである。

このようなシンデレラの他者への依存性は、フランスのシンデレラによく似た、グリム童話のシンデレラである「灰かぶり」(「シンデレラ」)において、さらに顕著であ

る。灰かぶりは、困ったことが起こったり、欲しいものがあつたりすると、必ず、お願いの呪文めいたものを唱えて、小鳥たちに願いを叶えてもらう。例えば、灰かぶりは、継母やその娘たちのひどい仕打ちに耐えかねて涙を流すのだが、「灰かぶりが、願いごとを口にだすと、小鳥は、望みどおりのものを投げ落としてくれる」³⁾のである。また、灰かぶりが、自分も王様のお城の舞踏会に出たいと継母に申し出た時に、城に行くのを許される条件として、灰の中にまいた一皿分の豆を2時間のうちに元通りに拾い出すことなど、いくつかの難題を出された時にも、自分で一粒の豆も拾わないうちに、「やさしいハトよ、キジバトよ。空の小鳥たちみんな来て、豆を拾うの、手伝っておくれ。」(p. 206)と鳥に助けを求める。さらに、鳥たちの助けを借りて、継母の出す難しい課題をすべてこなしたにもかかわらず、舞踏会に行くことを許されなかった時には、彼女は、「やさしい木よ からだをゆすり ゆすぶって 金を 銀を なげとくれ」(p. 209)と願い事を唱え、それに答えて小鳥が投げ落としてくれた豪華な衣装に身を包んで、舞踏会に駆けつけるのである。このように、灰かぶりは、困難な状況に対して受け身であるばかりでなく、自分では何もしようとはせず、不思議な力を持った小鳥という他者に常に頼っている。灰かぶり自身は、常に、小鳥に依存するのみで、自分の力で物事を解決しようとする姿勢が全く見られないのである。

3. ディズニーのシンデレラ

ディズニーは、伝統的なおとぎ話を子どもたちに親しみやすいようにアレンジして、映画や絵本の形で広く世界中に供給している。ディズニーのおとぎ話は、かわいらしい絵とわかりやすいストーリーによって、多くの子どもたちを引きつける。また、ディズニーのおとぎ話の絵本やビデオやVDVは、多くの言語に翻訳されて大量生産され、比較的安価で入手が容易である。そのため、シンデレラ物語のうちでも、ディズニーの *Cinderella* (『シンデレラ』) は、子どもたちの目に触れる機会が多く、中には、ディズニーのシンデレラ物語しか知らない子どももいるほどである。

ディズニーの『シンデレラ』は、基本的には、フランスのシンデレラの物語を下敷きにしているようであるが、ディズニー独自の解釈も随所に見られる。ディズニーの『シンデレラ』の大きな特徴のひとつは、シンデレラの夢の実現が強調されていることである。父の死後、彼女の魅力と美貌に嫉妬した継母によって、自分の館(chateau)の召使いにされたシンデレラは、継母やその娘たちによって、ひどいじめを受けるが、慎み深く従順であり、どんなに絶望的な状況にあっても、「きっといつかは幸せになれる」という夢を抱き続けるのである。

As time went by, the chateau fell into disrepair. The family fortunes were squandered upon the vain and selfish stepsisters while Cinderella was forced to become a servant in her own home.

Yet through it all, Cinderella remained ever gentle and kind. *With each and every dawn she found new hope that someday her dreams of happiness would come true. . . .*⁴⁾ (イタリックは筆者)

ディズニー版の『シンデレラ』においては、継母とその娘たちの、シンデレラに対するひどい仕打ちは、上にあげたフランス版やグリム版の『シンデレラ』の場合よりも執拗であり、彼女たちの残酷な性格も細かく具体的に書き込まれている。また、継母たちのシンデレラに対する仕打ちの原因は、彼女たちがシンデレラの魅力と美貌に嫉妬したためであることが、明らかにされているため、シンデレラにはいつさいの落ち度や責任は課せられず、非の打ち所のない完璧なヒロインであることが強調される。シンデレラは、どのような苦しい状況に置かれても、絶望せず、ひたすら、いつかは幸せになれるという夢を持ち続け、最後には、夢が実現する。すなわち、「夢を持ち続けければ、夢は必ず叶う」というのが、この『シンデレラ』の最大のテーマなのである。もちろん、ここでの夢は、すてきな男性との結婚によって幸せになるということであるのは、言うまでもないであろう。

Cinderella sometimes thought her dreams were all that kept her from sinking into despair. Ever since the death of her beloved father, Cinderella had been treated like a slave by her jealous stepmother Lady Tremaine—and her nasty stepsisters, Anastasia and Drizella. They ordered her around, dressed her in rags, and forced her to do all their household chores. To forget her troubles, Cinderella often escaped into dreams of a happier life. She dreamed of falling in love. . . of being loved in return. . . of someday leaving her horrible home behind forever. And because her dreams were all she had, Cinderella never stopped believing in them. (pp. 201-202 ; イタリックは筆者)

She got out of bed, went to the window, and glared at the majestic clock. “I hear you! ‘Come on, get up,’ you say! Even that clock orders me around,” she said to the birds and mice. “Well, there’s one thing no one can order me to do. *They can’t order me to stop dreaming.*” (p. 203 ; イタリックは筆者)

シンデレラの夢は、彼女を絶望から救う。シンデレラは、いつか誰かと恋に落ちてこ

の家から出て行って幸せになれるという夢を持ち続けることによって、耐え難いほどの苦しい日常にじっと耐え続ける。

しかしながら、シンデレラは、夢を見るばかりで、現実には、このつらい現状から脱出するために、自ら進んで何らかの行動をとることを考えることはない。シンデレラは、苦しい現実から夢の中に逃避しているのである。（“To forget her troubles, Cinderella often escaped into dreams of a happier life.” (p. 202)）ここで、彼女は、現実と向き合い、主体的に現実の問題に対処することのない受け身のヒロインとして描かれている。そのため、すてきな男性と恋に落ち、この家から出て行って幸せになるという夢にひたるばかりで、現実的に、自分の力でこの状況から抜けだし、自分自身の手で人生を切り開いていこうという姿勢が見られないのも当然である。（このようなシンデレラも、節目となる重要な場面においては、一度だけ積極的な行動をとる。国中の適齢期の女性全員が城の舞踏会へ招待されていることを知ったシンデレラは、意を決して “‘Every eligible maiden’ . . . why, that means that I can go, too.” (p. 231) と継母に訴える。結果として、継母が彼女の願いを聞き入れることはないのであるが、この発言によって、彼女の舞踏会に行きたいという強い意志が感じ取れるようになっていく。）

つらい現実から目をそらし、すてきな男性が現れて、この苦しみから自分を救って幸せにしてくれるという夢の中に逃避するシンデレラの願いは、彼女自身の努力や行動によってではなく、他者の非日常的な手段による助けによって叶えられる。もっとも、ネズミや小鳥たちが彼女の手助けをするのは、優しく従順で慎み深い彼女の性格のためであることが、物語の中で強調され、彼女の主体性のなさが目立ちにくくなっている。ネズミや小鳥たちなどが彼女が舞踏会に出席出来るように手助けをし、最終的には、彼女の妖精の名付け親（fairy godmother (p. 248)）が突然現れて、魔法を使って彼女を城の舞踏会に送り出してくれる。シンデレラの友達のネズミと小鳥が、シンデレラが舞踏会に着ていくためのドレスを仕上げていく様子を描いた以下の場面においても、動物たちがシンデレラの夢の実現の手伝いをしていることが言及されている。

Slowly but surely the beautiful dress was coming to life. It was hard work, but they all knew it would be worth it. *They were making it possible for their friend Cinderella to attend the ball—and maybe make some of her dreams come true.* (p. 239 ; イタリアックは筆者)

ディズニーの『シンデレラ』のもうひとつの大きな特徴は、ロマンティック・ラブの強調である。つまり、ディズニーの『シンデレラ』においては、シンデレラと王子

の純粋な愛が強調されているのである。王子をそろそろ結婚させたいと思った王は、王子の結婚相手を見つけるために、国中の適齢期の女性を集めて舞踏会を開き、王子にふさわしい相手を選ぶことを考える。結婚には愛が必要ではということをはのめかす家臣に対して、国王は、“Love! . . . Hah! What is love? Just a boy meeting a girl under the right conditions. So, we must simply arrange the conditions.” (p. 224) と述べ、愛にもとづく結婚の必要性を否定する。このような考えを覆し、シンデレラと王子は、またたく間に恋に落ちる。城についた直後のシンデレラを描いた場面は、ロマンティック・ラブの始まりをドラマティックに示している。

She looked up and caught her breath as she found herself gazing into the deep brown eyes of a tall, broad-shouldered young gentleman. When he gave her a kind smile and politely asked her to dance, Cinderella was astonished. She could hardly believe she was already being asked to dance—especially by someone so handsome. She had been hoping to get a look at the prince, but she decided that that could wait. She was sure that even the prince couldn't possibly be any more handsome than this charming young man. (pp. 257-258)

シンデレラは、城に着いて、ひとりの男性を目にした途端に運命的な恋をする。シンデレラは、王子をひと目見たいと思って城に来たのであるが、この男性に惹かれたシンデレラは、王子といえども、この男性よりもすばらしいはずがないと確信する。シンデレラとこの男性は、踊りを踊った後、一緒に庭に出て、お互いに愛し合っていることを確認する。 (“Cinderella looked up at the handsome young man, her eyes filled with the same love she could see reflected in his own. A moment later their lips met in a long, tender kiss.” (p. 261)) この男性が、実は王子であることは後になって明かされる。そのため、シンデレラが王子と知らずにこの男性に惹かれたこと、さらには、王子ではなくてもこの男性を選んだであろうことから、シンデレラの打算のない純粋な愛情が強調されるのである。 (“I'm sure the prince himself couldn't have been more charming.” “And I don't even know his name.” (p. 265))

シンデレラの、男性と恋に落ち家を出て幸せになるという夢は、またとない形で叶うことになる。舞踏会の男性は王子であり、王子はシンデレラに夢中で、帰りにシンデレラが忘れたガラスの靴を手掛かりに彼女を捜しているということを知り、シンデレラは、自分の夢が実現しそうな気配に喜びを隠しきれない。

“Such wonderful thoughts were whirling around in her head that she could

hardly take them all in. *She had to be dreaming, she decided.* *With a burst of happiness she realized that she wasn't dreaming after all—it was all true!* The gentle, handsome, charming prince really wanted to marry her! *Finally, finally my dreams are to come true, she thought ecstatically.* (pp. 274-275 ; her以外のイタリックは筆者)

シンデレラが、自分が好きになった男性が王子であり、彼も自分のことを愛しており、自分と結婚したいと思っているということを知った上の引用の場面においては、夢についての言及が繰り返しなされ、夢をあきらめないこと、夢を持ち続けていれば、夢は叶うということが強調される。夢が現実のものとなったシンデレラの歓喜は、継母が王子の相手がシンデレラであることに気づき、彼女を部屋に閉じこめることによって、中断され、絶望に変わるが、ここでも、シンデレラは、ネズミや小鳥たちに助けられて部屋を抜け出し、王の家臣に自分がガラスの靴の持ち主であることを知らせ、夢を実現して、王子の後になり、幸せになることが出来る。物語は、*“And finally, as the prince leaned over to kiss his new bride, Cinderella thought about how she had learned never, ever to give up on her dreams.”* (p. 290 ; イタリックは筆者) という一節で終わるが、この最後の一節においても、夢をあきらめないことの重要性がさらに強調されるのである。

このように、ディズニーの『シンデレラ』は、おとぎ話の『シンデレラ』を大筋では踏襲しながらも、おとぎ話では平板であったシンデレラの内面を描き出すことによって、シンデレラ像に深みを持たせている。また、シンデレラは、ただ男性から一方的に選ばれるのではなく、自分の選んだ男性と愛のある結婚をして幸せになることから、シンデレラ自身の選択と意志が提示されているのは良いことである。さらに、夢を持ち続けることの重要性を強調することにより、いかなる苦境にあっても、絶望せず、希望を持って生きることの大切さを伝えるメッセージ性を有しているのは、評価に値するであろう。

しかしながら、シンデレラの夢は、男性が自分をこの苦境から救い出してくれることであり、彼女は、自分の人生を変えるのが、自分自身の努力によってではなく、自分を愛して救ってくれる男性の出現であると考えていることから、彼女が、依然として、主体性のない受け身で他者依存的なヒロインであることには変わりがない。夢や希望を持ち続けることの大切さを説くところは評価出来るものの、シンデレラの夢自体が現実を直視するのを避けるための現実逃避的な手段となっていて、夢を持ち続けるというポジティブなメッセージが、ただ待っていれば誰かが助けてくれるというメッセージにすり替わりかねない危険性がある。そのため、結果として、ディズニーの『シンデレラ』は、ただ現実には耐えていれば、自分は何も積極的に動かなくても、そ

のうちきつといいことがある、誰かが幸せにしてくれるというメッセージを発信しているものであり、夢や希望を持って、現実と立ち向かい、自分の力で人生を切り開く女性像を提示するには至っていないのである。

4. もうひとつのシンデレラ像 : *Princess Furball*

数多いシンデレラ物語のうち、一般に流布している受け身のシンデレラとは異なるヒロイン像を提示しているのが、グリム兄弟による「千枚皮」(“Allerleirauh”)の物語である。⁵⁾「千枚皮」は、基本的には、『シンデレラ』や「灰かぶり」と同じ、玉の輿物語ではあるが、シンデレラに相当するヒロイン(千種類の動物の毛皮を使った上着を着ていることから千枚皮と呼ばれる)は、苦境にあっても絶望せず、自らの知恵と能力と行動力で、主体性を持って自分の運命を切り開き、王の後となって幸せをつかむ女性として描かれている。

Princess Furball(『毛皮ひめ』)⁶⁾は、アメリカの高名な児童文学者である Charlotte Huck が、子供の頃に大好きだったという、おそらく「千枚皮」に起源を持つと思われるおとぎ話を再話したものであり、彼女によって多少の変更が加えられている。

『毛皮ひめ』の魅力は、主人公の機知と行動力であり、主体的に自らの人生を切り開いていく強さとバイタリティである。物語の始まり直後に、後に毛皮ひめと呼ばれることになる姫の持つ賢さや能力や強さが、乳母との関係の中で、説得力のある方法で物語に導入され、毛皮ひめが後に披露する、どんな苦境にあってもあきらめず、自分の力で運命を切り開く強さと行動力の伏線となっている。

毛皮ひめは、母の死後、父である王に全く顧みられなかったが、母親のような愛情を注いでくれる乳母の手によって、美しいばかりでなく、賢く知恵があり、たくましく生活力もある女性に成長する。毛皮ひめを育てる乳母は、グリムの「千枚皮」には登場せず、後の毛皮ひめのバイタリティや行動力への言及も、『毛皮ひめ』独自のものである。

Luckily, her old nurse, who loved the Princess as a mother loves a daughter, saw that she was lonely and allowed her to run and play with the village children. And some days the Princess visited with the Cook in the large kitchen learned to make soup and bread and cakes. Yet the nurse never forgot that the young girl was a princess. She taught her the manners of a lady and arranged for tutors to instruct her in reading, writing, and dancing. And so the Princess grew to be strong and capable and clever,

*besides being beautiful.*⁷⁾ (イタリックは筆者)

乳母は、毛皮ひめを村の子どもたちと遊ばせたり、料理番にスープなどの料理の作り方を習わせたり、王女として必要なマナーや読み書きやダンス習わせる。この乳母のおかげで、毛皮ひめは、「美しいだけでなく、強くて、有能な、賢い」女性に成長する。グリム童話の「千枚皮」には、毛皮ひめを育てる乳母は登場せず、後に毛皮ひめ自身を助けることになる彼女の賢さや強さやバイタリティへの言及もない。ただ、母親譲りの金色の髪と美しさが語られるだけである。⁸⁾ 著者がこの部分を付け加えたのには、著者のフェミニスト的な意図があると思われる。毛皮ひめは、望むばかりで自分では何もしないシンデレラとは違って、魔法や動物の助けを借りるようなことは一切しない。彼女は、もともと備えていた知性や生活力やたくましさだけを頼りに、自らの運命を切り開いていくのである。そのことを読者に強く印象づけるために王女の生い立ちの部分が加えられていると思われる。さらに、毛皮ひめをエレガントであると同時に知的で生活力のある、何でも出来る強い女性に育てた乳母と毛皮ひめの関係は、多くのフェミニズム童話に登場する、エンパワーメントのための女性同士の連帯を感じさせる。

毛皮ひめは、父である王の命により、荷車50台分の銀貨と引き換えに、鬼のような男と無理矢理結婚させられることになる。彼女は、そのような不条理な結婚を嫌って拒絶するが、父王は決定を覆すことはない。忌み嫌うべき結婚が避けられない絶望的な事態になっても、毛皮ひめは、他のおとぎ話のヒロインのようにただ悲しみにくれたり、現実逃避をすることはしない。それどころか、決して絶望的にならず、現実を直視して冷静に解決策を模索するのである。このような毛皮ひめの姿勢は、この物語全体を通して、随所に見られる。彼女は、持ち前の機知をはたらかせて、父王に、結婚祝いとして、とうてい作ることが出来ないと思われる豪華な3枚のドレスと千種類の動物の毛皮で作ったコートを作ってくれるようにねだり、ドレスとコートが出来上がらないために結婚式が取りやめになることをもくろむ。しかしながら、ドレスとコートは出来上がってしまい、結婚式が明日に迫る。この時も、毛皮ひめは、絶望したり、悲しみにくれたり、何の根拠もない夢を見て現実を忘れようとしたりするのではなく、また、魔法や動物の助けを借りるのでもなく、現実を直視して、自分の出来る範囲で突破口を見いだすのである。彼女は、結婚を避けるために、意を決して、雪の中をひとりで城から抜け出すのである。その際、毛皮ひめは、千種類の毛皮で出来たコートを身にまとい、例の3枚のドレスと金の指輪と指ぬきと紡ぎ車と料理に使うスパイスを小さな入れ物に入れて持って行く。後に彼女は、これらを効果的に用いて、苦境から脱出することに成功するのだが、後々役に立てるためにこのようなものを持ち出すところにも、彼女の知性と冷静な判断力が表れている。このように、『毛皮ひめ』

には、シンデレラとは大きく異なる、絶望して他者の助けを待つだけの弱いヒロインではない行動的で主体性を持って前向きに行動する知的でたくましい女性像が見られる。また、毛皮ひめは、偶然や非日常的な手段に頼らないため、彼女の活躍には現実味と説得力があると言える。

城から抜け出した王女は、深い森に隠れているところを、狩りに来た他国の王の一行に見つかる。その時、姫は、機会を逃さず、王に随行している狩人たちに、身分を隠して、“Please don’t hurt me. I have no home. Have pity on me and take me with you.” (p. 16) と訴え、城に連れて行ってもらい、かまどの灰の掃除をしたりする料理番の下働き (cinder maid (p. 20)) となる。城では、日の差さない薪小屋で寝起きをし、かまどの灰の掃除の他、薪運びや、水くみ、鳥の羽むしりなど、誰もが嫌うつらい仕事をみな引き受けることになる。このような状況が続き、毛皮ひめは、このままでは、この生活から抜け出すことが出来ないと感じる。 (“Poor Furball lived for a long time as a servant to the servants. She could not see how her life would ever change.” (p. 18))

毛皮ひめは、このままではこの生活がいつまでも続くと考えた時、絶望に打ちひしがれたり、そのうち誰かが自分を助けに来てくれるかも知れないという幻想を抱いたりすることはない。毛皮ひめが、機会を捉えて、自分の人生を自分で切り開こうとして行動に移るさまは、上に引用した、このままでは今のつらい生活がいつまでも続くと彼女が感じた部分の直後に描かれる。毛皮ひめは、王が舞踏会を開くことを聞きつけ、料理番に、舞踏会に来る人たちを一目でいいから見せてくれるように頼む。

(“‘Please,’ she said to the Cook, ‘may I go for a little while to see the guests arrive? I promise you that no one will catch even a glimpse of me.’” (p. 20)) 毛皮ひめは、30分だけ許しをもらうと、顔についた灰やすずを洗い落とし、髪を覆っているスカーフをはずして金色の髪をとくと、3枚の豪華なドレスのうちの1枚を来て、城の正面から入っていく。光り輝くばかりの彼女の美しさに、みなはよその国の王女だと思うほどである。王子は、彼女をダンスに誘い、彼女の美しさにすっかり魅了される。 (“‘Never have I seen anyone so beautiful and charming,’ he thought to himself as they danced.” (p. 22)) 30分後、毛皮ひめは舞踏会の途中で姿を消し、服を着替えて、毛皮を着た薄汚れた姿で台所に戻る。王の夕食用のスープを作るように命じられた毛皮ひめは、ここでも、機会をとらえて行動を起こす。持ち前の料理の腕と知恵を働かせて、おいしいスープを作り、王が自分を探し出してくれるようにスープに細工をする。王のスープに、隠し持っていた金の指輪を入れるのである。指輪に気づいた王は、このスープを作った毛皮ひめを呼び出して事情を聞くが、彼女は身分を明かさず、指輪についても黙ったままである。これは、毛皮ひめの知的な駆け引きであり、毛皮ひめは、王が確実に自分のものになるように、これを3回繰り返す。あ

との2回とも、この時と同じやり方で舞踏会に出かけ、王と踊り、輝くばかりの美しさで彼を魅了し、その後直ちに戻って、スープに金の指ぬきと紡ぎ車を入れる細工をして、王が事情を聞くために彼女を呼び出すように仕向けるのである。3回目、王は、毛皮ひめが姿を消さないうちに、舞踏会で踊る毛皮ひめの指に金の指輪を秘かにはめる。その金の指輪が手掛かりになり、毛皮ひめは、王に正体を見つけれ、求婚されて王妃となる。このように、毛皮ひめは、自分の知恵と行動で、苦境から脱出し、自分が選んだ男性と結婚し、幸福を手に入れるのである。シンデレラの受け身的で、他者依存的な姿に比べて、どんな状況にあっても、絶望せず、自分の手で運命を切り開いていく毛皮ひめの姿は、女の子の読者にとって、人生を過ごしていく上で、シンデレラよりもずっと良いロールモデルとなるのは間違いないであろう。夢を持ち続けられ、夢は叶う。ただし、幸せになるためには、誰かが手をさしのべてくれるのを座して待つのではなく、自分の力で行動することも必要であると毛皮ひめの物語は訴えるのである。

さらに、王の態度にも注目するべきであろう。(王も、毛皮ひめに劣らず聡明であり、機知を用いて舞踏会に現れる美しい姫の正体を突き止める。)以下の引用に見られるように、王が毛皮ひめの魅力を、美しさだけではなく、彼女の賢さにも見いだしているところが、女性の美しさや従順さだけで女性を評価せず、女性の賢さを肯定的にとらえる新しいおとぎ話の王様像を提示している。

The King told the Princess he loved her and asked her to marry him.

"You have the beauty of the sun, the moon, and the stars. *You are as clever as you are lovely,*" he said, "and I cannot live without you." (p. 36 ; イタリアックは筆者)

グリムの「千枚皮」においては、王が千枚皮の正体を知る場面は、以下のようになっている。

王さまはマントをつかんで、さっとはぎとりました。すると、金色の髪の毛がみんなの目にうつり、かがやくばかりの姿が現われて、もう、かくれようもなくなりました。そして、お姫さまが、すすと灰を顔からふきとると、その美しさはなおさらまして、この世のだれも見ただことのないほどになりました。

王さまは、いいました。

「あなたは、わたしの愛する花嫁。わたしたちはもう、けっして、はなれないよ。」

そうして、婚礼の式があげられ、ふたりは死ぬまで、うれしくたのしくりました。⁹⁾

このように、グリムの「千枚皮」においては、ヒロインの美しさには言及されるものの、毛皮ひめと同じ機知を働かせた彼女の賢さに対する評価はおろか、言及すらなされていない。また、王の求婚のあと、「そして、婚礼の式があげられ、ふたりは死ぬまで、うれしくたのしくくらししました」という一文で物語が終わり、千枚皮には、発言する機会がない。

それに比べて、『毛皮ひめ』においては、上で引用した王の求婚の後、以下のような記述が続く。

Then the Princess told the King her story, and he loved her even more than before. The wedding took place the next day. Everyone who had attended the balls came to see the marriage of Furball and the King. The Cook, who made better pastries than soup, stayed up all night baking an enormous cake for the bridal couple.

And the King and his new Queen lived happily ever after. (pp. 38-40)

千枚皮の場合と違って、求婚された後、毛皮ひめは、これまでのいきさつを王に語るが、王はその話を聞いて、ますます彼女のことが好きになる。語る女性とその語りを評価する男性というのも、従来のおとぎ話には、あまり見られない構図である。ここには、ステレオタイプとは異なる知的で行動的な女性像に加えて、語り合い理解し合う対等な男女の関係も描かれていると言える。

5. おわりに

シンデレラ・コンプレックス (the Cinderella complex) という言葉がある。この言葉を作り出した Dowling は、同名の著書の中で、幼い頃に読んだシンデレラ物語が、いつかすてきな男性が現れて、この不満足な現状から自分を救い出してくれるのではないかという現実からの逃避願望と、努力しなくても待っているだけでいいのだという依存心を女性の心に植え付け、女性の自立を拒んでいることを指摘した。¹⁰⁾ 今日でも、子どもたちに親しまれているおとぎ話の中に、そのような要素は色濃く残っている。ディズニーの『シンデレラ』は、夢を持ち続けることの大切さを強調し、生きるための力の源としての夢の持つ力を説きながら、同時に、夢を現実からの逃避の手段として用い、何もしなくても願ってさえいれば夢は叶うという矛盾したメッセージを発信しているように思われる。いかなる時も、夢や希望を持ち、その夢を実現する

ために努力し、行動することが必要なのは、女性も男性も同じことであろう。(現実世界では、助けてくれる妖精も小鳥やネズミたちもないのだから。)

おとぎ話のヒロインは、多くの場合、受け身で依存心が強い女性像である。子どもに与えられる物語の中の男性像は多種多様であり、自己実現や社会的な成功を求めることが多いのに対して、女性像は、受け身のシンデレラのようなステレオタイプであることが多く、多くの場合、結婚が最終的な目標であり、男性によって彼女の人生が決まるのである。

驚くべきことに、Zippeによると、ペローが再話した「シンデレラ」の元となった口承版の「シンデレラ」のヒロインは、きわめて「現代的な」女性である。

「サンドリヨン」で忘れてはならないのは、個々の口承版は、(社会の保存者である死んだ母親の助けを借りて) 社会における威信と権利を取り戻そうとする若い女性の苦闘を描く、母権制の伝統から生まれたものということである。サンドリヨンは、身を貶められ、ぼろを着せられ、つらい仕事を強いられた後、不当な仕打ちを甘受せず、反抗し、もがき、不利な立場を相殺しようとする。そうやって、目標に達するため、積極的に助けを求め、知恵を働かせる。その目標とは結婚ではなく、認められることだ。パロック風の装いもしなければ、もろく壊れるガラスの靴もはいてはいない。むしろ、真実の姿をあらわす装いをしている。なくした革の靴が見つかり、王子と結婚するのは、彼女の強い独立した人格が認められたことを象徴的に示している。ペローの作品では、サンドリヨンは自分がどれだけ従順で、働き者かを示すように変えられている。自分の振舞いを心得ているという、その理由だけで、名付け親の仙女と王子に助けられるのだ。ペローは、民衆版を笑いものにし、受け身の女性という別のモデルを紹介したが、読者はすっかりそれを真に受けてしまうことになった。¹¹⁾

ペローは、従順で受け身のシンデレラを世に広めたが、ペローが改訂を加える前の口承版のシンデレラは、たくましく、不当な扱いを甘受せず、自らの知恵と行動力で人生を切り開いている。また、彼女にとっては、結婚が最終的な到達目標ではなく、男性に依存することもない。彼女が最終的に求めるのは、おとぎ話の男性の登場人物たちと同じように、社会で認められることと自己実現なのである。『毛皮ひめ』に描かれたような、運命を切り開くために積極的に行動するヒロインは、300年以上も昔のおとぎ話の中には存在していたのである。

これからの新しいおとぎ話に求められることは、長い年月にわたってジェンダー化されステレオタイプ化されてきたヒロイン像に、多様性を持たせることであろう。すなわち、物語の中で、女の子が選択できるロールモデルとなる多様な女性像を提示す

ることである。近年の傾向として、それまでの、受け身で主体性のないか弱いヒロインのアンティテーゼとして、意志を持った強い女性（場合によっては、戦う女性）が創造されていることが多いが、今後は、その両極を埋めるさらに多様な女性像の出現を待つ必要があるだろう。

相変わらず、シンデレラ物語の人気は衰えないが、時代の変化とともに、シンデレラ像も変化する。ディズニーも、*Cinderella II* というシンデレラの後日談を出し、夢見るヒロインのその後の変貌を扱っている。また、シンデレラ物語の真相という設定で、シンデレラが消極的な受け身の女性ではなく、主体性を持った活発で行動的な女性であったことを描いた *Ever After* という作品も作られた。また、シンデレラを男性にしてジェンダーを逆転させた *Prince Cinders* という絵本もある。このように、『シンデレラ』をはじめとして、ステレオタイプの女性像を提示することの多いおとぎ話を、多様な価値観で語り直そうという動きが活発である。世界が、ポストコロニアルを経て、グローバル化に向かう今日、白人、男性、中産階級、キリスト教徒という、西洋文化の中心的な文化的価値を「普遍的な価値」として維持し、それ以外の「他者」に押しつけるのは難しくなってきた。ここに見られる女性の描き方の変化も、そのような多文化主義の拡がりの中の大きな流れのひとつととらえることが出来るであろう。

註

- 1) ペローの『シンデレラ』については、ペロー（著）、天沢退二郎（訳）『ペロー童話集』（岩波書店、2003）を参照した。
- 2) この物語のタイトルの英訳は、“Cinderella”である。日本語でも、「シンデレラ」と訳される場合もある。
- 3) フェリクス・ホフマン（編）、大塚勇三（訳）「灰かぶり」『グリムの昔話1』（福音館書、2002）、p. 205。「灰かぶり」からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。
- 4) *Cinderella* (Disney Press, 1995), p. 199. ディズニーの *Cinderella* からの引用は、すべてこの版により、本文にページ数のみを記す。なお、この作品は、Zoe Lewis によるディズニーのアニメ映画にもとづいているが、絵本の作者名は明らかにされていない。

- 5) 「千枚皮」は、「千色皮」と訳される場合もある。英訳の場合も、“Many Furs” “Thousand Furs” などいろいろな訳語がある。
- 6) Princess Furball の日本語訳については、日本で親しまれている邦訳の題名にならって、「毛皮ひめ」を採用することにした。松井るり子訳『毛皮ひめ』（セーラー出版、1991）参照。
- 7) Charlotte Huck, *Princess Furball*, (Harper Trophy, 1989), p. 6. *Princess Furball* からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。
- 8) 『毛皮ひめ』が、グリムの「千枚皮」と大きく異なっているもうひとつの点は、「千枚皮」においては、主人公が結婚させられそうになる相手が、主人公の実の父である国王であることである。王は、周囲から再婚を勧められても、亡くなった後のことが忘れられず、妻の面影を色濃く残している実の娘と結婚することを決める。王女は、父と結婚することなど許されないことだとして、『毛皮ひめ』のヒロインと同じ方法で何としても結婚を回避しようとするが、うまくいかず、城から逃げ出す。以下に引用した『毛皮ひめ』の前書きにもあるように、『毛皮ひめ』の絵本からは、「千枚皮」に見られる “hated marriage” すなわち、近親婚のモチーフが排除されており、その代わりに、父王が銀貨と引き換えに決めた鬼のような男との強制的な結婚という、姫にとって受け入れがたい結婚が用意されているのである。

“Furball,” one of the many variants of the Cinderella story, was my favorite childhood fairy tale. Readers will recognize it as being similar to the English “Catskin,” and to the Grimms’ “Many Furs” or “Thousand Furs.” With the exception of the well-known French Cinderella tale with its glass slipper ending, this variant with the “hated marriage” motif is the most popular of the more than five hundred variants of the Cinderella story. In rewriting this version, I believe I have been faithful to the psychological truth of the earlier tellings. (p. 4)

- 9) フェリクス・ホフマン（編）、大塚勇三（訳）「千色皮」『グリムの昔話2』（福音館書店、2002）、p. 92.
- 10) Colette Dowling, *The Cinderella Complex: Women’s Hidden Fear of Independence*, (Simon & Schuster, 1981) 参照。
- 11) ジャック・ザイプス（著）、鈴木晶、木村慧子（訳）『おとぎ話の社会史——文明化の芸術から転覆の芸術へ』（新曜社、2001）、pp. 56-57.